

訳注大越史記全書（3）越鑑通考総論

平 塚 順 良*

（受付 2022年5月19日）

【原文1】

「越鑑通考総論」

臣聞「虞典」即「虞書」，自孔子刪『尚書』以爲「典」「謨」，而帝王修齊治平之道益彰^①。『春秋』本魯史，自孔子修『春秋』以定褒貶，而天子典禮命討之權益重。是以聖帝明王之治天下，有志於任君師之責，不可不究帝王之學，有志於究帝王之學，不可不明古今之理。然則諸史有作，所以爲歷代人君之龜鑑，意有在矣。

欽惟皇上陛下，聖學高明，道心純粹，紹祖功宗德之休^②，應天與人歸之會^③，大業既成，治功已定，乃銳意太平，留心墳典，有志於帝王之學，洞究乎聖賢之書。覽聖宗淳皇帝『天南餘暇』諸集，而監夫聖謨典則之詳。繹德宗建皇帝『樂苑餘閑』各編，而會夫帝範淵原之懿。燕暇則隨事詩賦，言形警戒，即虞舜勅天之歌也^④。器皿則寓理制銘，心存修省，即殷湯盤銘之戒也^⑤。凡其經天緯地之文^⑥，治國齊家之道，靡不貫通。日啓經筵，講求治理。乃命兵部尚書・國子監司業兼史館都總裁臣武瓊撰『越鑑通考』^⑦，述自鴻龐氏至十二使君，別爲「外紀」，自丁先皇至國朝太祖高皇帝大定之初年，著爲「本紀」，凡二十六卷。大而三綱五常之道，以至事物細微之理，莫不該載。又命祕書監黃樞等寫爲別本，以垂永久。於是皇上陛下，以宸心淵廣，而包括乎乾坤。以天智光明，而洞燭乎日月。欲撮其大要，使一覽之間，而天地綱常之道益著，帝王治平之道益明。如大綱既舉，而衆目畢張，如明鏡既懸，而萬象皆照，其有關於世教者大矣。乃命臣黎嵩，爲之「總論」^⑧。

顧臣學識迂疎，見聞淺薄，奚足以商確古今，發揮至理。然既叨奉明詔，敢不對揚聖天子之休命乎^⑨。臣謹拜手稽首，而獻論曰，臣聞『周易』曰「有天地然後有萬物，有萬物然後有夫婦，有夫婦然後有父子，有父子然後有君臣」^⑩。此綱常之道所由著也。『大學』曰「心正而后身修，身修而后家齊，家齊而后國治，國治而后天下平」。此治平之道所由行也。然則天地之道不能外綱常以立極，帝王之道豈能外綱常以爲治哉。

* 広島修道大学

【和訳1】

「越鑑通考総論」

私の見聞によると、「虞典」とはつまり『尚書』の「虞書」である。孔子が『尚書』を撰定して、「堯典」・「舜典」・「大禹謨」・「皋陶謨」の諸篇を作ってから、帝王の修身・齐家・治国・平天下の道はますます顕著となった①。『春秋』は、魯国の歴史に基づいている。孔子が『春秋』を編纂して、称賛と批判とをその一字一字にこめてから、天子がおこなう儀礼・討伐の威厳はますます荘重になった。こうして英明な君主が天下を統治し、天子としての責務を果たそうとすれば、帝王としての学問を究めなければならなくなった。帝王としての学問を究めようとするならば、古今の道理に通じていなければならなくなった。そうであるならば諸々の史書が作られるのは、歴代の君主が教訓とするためのものであり、史書の意義はそこにこそある。

謹んで申し上げるに、皇帝陛下は、儒学に精通し、道徳は完璧そのもの、善美なる先祖の功績を継承し②、時あたかも天が使命を与え民が身を委ねるのにお応えになった③。大業は成功をおさめ、治国の政績も実を結んだ。そこで太平の維持に励み、古代の典籍に専心しようと、帝王の学問に傾注し、聖賢の著わした書籍を研究した。聖宗淳皇帝の『天南余暇』諸集を閲覧すれば、その聖旨・制度の詳細を手本とすることができた。また徳宗建皇帝の『楽苑余閑』各編をよく読めば、その帝王としての模範・事物の根源の偉大さを目にする事ができた。余暇には事々に詩や賦を作り、その言葉は戒めを表出し、まさに舜帝の勅天の歌さながらであった④。器物に理念を託して銘文を鑄込み、修身反省に心がけ、まさに成湯の盤銘の戒めさながらであった⑤。天下をきりもりする文徳⑥、修身・齐家・治国・平天下の道、すべてに通暁しておられる。毎日、講席を設け、統治について検討をおこなう内に、兵部尚書・国子監司業を務め史館都総裁を兼任する臣下の武瓊に命令を下し、『越鑑通考』を撰述させることにした⑦。鴻臚氏から十二使君まで記述した部分を、分離して外紀とした。丁先皇から本朝の太祖高皇帝が天下を平定した年までを本紀とし、これらを合わせて二十六巻とした。偉大な三綱五常の道へと導きつつ、物事の微細な理路にまでも言及し、すべてを網羅している。さらに秘書監の黄枢らに命令を下し、写本をつくらせ、これを永遠に伝えようとした。こうして皇帝陛下の広大深淵な御心による包容は天地をも超越し、その輝かしい天賦の智慧による照射は日月をも超越した。その概要を選び出して、これを一目見れば、天下の三綱五常の道はますます顕著となり、帝王の治国平天下の道はますます明確となるようにしようとした。それは例えば大綱を掲げてみな目を覚ますようなもの、澄んだ鏡を掛けて森羅万象をみな照らし出すようなものだ。これは正しい教えにまつわる重大な事業である。そこで臣下の黎嵩に命令を下して、「越鑑通考総論」を作らせた⑧。

私の学識は時宜に即さず、見聞は浅薄、古今の歴史を検討し、真理を解説することはでき

そうもない。しかし既にかたじけなくも詔を奉った上は、聖天子の立派な命令にこたえこれを賛美しないわけにはいかない⑨。私は謹んで跪いて叩頭し、論文を献上して申し上げよう。私が見聞するに、『周易』に「天地があつて初めて万物が生み出され、万物があつて初めて夫婦の関係が成立し、夫婦がいて初めて親子の関係が成立し、親子がいて初めて君臣の関係が成立する」と言う⑩。これこそが三綱五常の道を奨励する根拠である。『大学』に「一心が正しくなつて、はじめて一身がよく修まる。一身がよく修まって、はじめて一家が和合する。一家が和合して、はじめて一国がよく治まる。一国がよく治まって、はじめて世界中が平和になる」と言う。これこそが治国平天下の道を実行する根拠である。そうであるなら、天下の道が三綱五常から逸脱しては、原則を立てることはできない。帝王の道が三綱五常から逸脱しては、国は治まらないのだ。

【注1】

- ①修斉治平 『礼記』大学に「古之欲明明徳於天下者、先治其国。欲治其国者、先斉其家。欲斉其家者、先修其身（古えの明徳を天下に明らかにせんと欲する者は、先ず其の国を治む。其の国を治めんと欲する者は、先ず其の家を斉う。其の家を斉えんと欲する者は、先ず其の身を修む）」とある。
- ②祖功宗徳 『孔子家語』廟制に「古者祖有功而宗有徳、謂之祖宗者、其廟皆不毀（古えは有功を祖とし有徳を宗とし、之を祖宗と謂う者は、其の廟皆毀たず）」とある。
- ③天与人帰 『孟子』万章章句上に「然則舜有天下也、孰与之。曰、天与之（然らば則ち舜の天下を有つや、孰か之を与う。曰わく、天之を与う）」とあり、また『春秋穀梁伝』莊公三年に「其曰王者、民之所帰往也（其の王と曰う者は、民の帰往する所なり）」とある。
- ④勅天 『尚書』益稷に「帝庸作歌曰、勅天之命、惟時惟幾（帝庸つて歌を作りて曰わく、天の命を勅し、惟れ時に惟れ幾なりと）」とある。
- ⑤盤銘 『礼記』大学に「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新（湯の盤の銘に曰わく、苟に日に新たに、日に新たに、又日に新たなれと）」とある。
- ⑥経天緯地… 『国語』周語下に「経之以天、緯之以地、経緯不爽、文之象也（之を経するに天を以てし、之を緯するに地を以てして、経緯爽わざるは、文の象なり）」とある。
- ⑦越鑑通考 (1) 【3】では大越通鑑と呼ばれていた。洪順三年【1511】には「進『大越通鑑通考』（『大越通鑑通考』を進む）」とある。越鑑通考・大越通鑑・大越通鑑通考は異名同書の関係にある。
- ⑧総論 (1) 【3】では大越通鑑総論と呼ばれていた。(3) 【1】⑦を参照のこと。
- ⑨敢不對揚… 『尚書』説命下に「説拝稽首曰、敢對揚天子之休命（説は拝稽首して曰わく、敢えて天子の休命に對揚せん）」とある。
- ⑩周易 『易』序卦伝に「有天地然後有万物。有万物然後有男女。有男女然後有夫婦。有夫婦

然後有父子。有父子然後有君臣（天地有りて然る後に万物有り。万物有りて然る後に男女有り。男女有りて然る後に夫婦有り。夫婦有りて然る後に父子有り。父子有りて然る後に君臣有り）」とある。

【原文2】

粵自鴻龐氏涇陽王繼神農之後，娶洞庭君女，明夫婦之道，正風化之原。君焉則以德化民，垂衣拱手^①。民焉則耕田鑿井，出作入息。其炎帝太古之風歟。貉龍君繼鴻龐之世，娶甌貉氏女，而生有百男之祥，百粵之祖實始於此。享國歷年，最爲久長，富壽多男，自古以來未之有也。雄王嗣貉龍之統，務施德惠，而撫綏其民，專事農桑之業，靡有兵戈之警，繼世子孫竝以雄王爲號，祚凡十八世，歲經二千餘年，結繩爲政^②，民無詐僞，可見淳龐樸野之俗矣。後王德衰，怠於政事，廢武備而不修，耽酒色以爲樂，蜀兵一至而國統遂亡。安陽王西徙巴蜀^③，南滅雄王，都于螺城。保有甌貉，得龜爪之弩，卻秦人之兵，狃於戰勝，安樂而驕，趙兵來攻，而邊疆失守。趙武帝乘秦之亂，奄有嶺表^④，都于番禺，與漢高祖各帝一方，有愛民之仁，有保邦之智。武功懾乎蠶叢，文教振乎象郡。以詩書而化訓國俗，以仁義而固結人心，教民耕種，國富兵強。至於遣使一節，詞極謙遜，南北交歡，天下無事，享國百有餘年，眞英雄才略之主也。文王以武帝之嫡孫，繼承舊業，凡其制度典章，一遵先王成憲^⑤，感隣以義，卻敵安邊，亦繼體守成之君也。明王嗣德之初^⑥，安於縱弛。穆后得寵，越姬見廢，國中不睦，紀綱大亂。哀王以童稚之年，昧經國之理，母后驕淫，權臣執政，而趙家基業，卒至陵夷。術陽王以哀王之兄，建立於權臣之手，智力短淺，強虜來侵，而趙氏基圖，從茲覆沒。迹其哀王之禍，雖出於呂嘉，而實由明王寵嬖穆后以啓之也。女色之傾人國家如此，深可爲戒。逮夫徵王，胄出雄王之後，姊妹俱以勇略聞。忿蘇定苛政，糾率諸部，奮舉雄師，大振威名，郡縣響應，故能略定嶺外六十五城，盡復南越故境，亦女中之豪傑也。然天不祚貉，漢兵來侵，向使當時有英雄才略之主，則漢豈敢窺於梅嶺哉。士王習魯國之風流，學問博洽，謙虛下士，化國俗以詩書，淑人心以禮樂，治國踰四十年，境內無事。然而子徽輕信士匡之言，不設兵備，遂爲呂岱所害。趙姬以九眞之女，聚徒山中，攻破城邑，諸部景從，易於反掌。雖未據嶺表如徵王故事，亦女中之雄才也。前南帝有聰明之至性，備文武之奇才，北逐蕭詧，南平林邑，建國號，正尊稱，置百官，紀年號，有帝王規畫之大略。奈何澈湖之師已潰，霸先之寇方張，白牛之書^⑦，蓋有天數也。桃郎王以南帝之兄，收餘燼之卒，一戰而敗，退保野能，蓋其威力不足也。趙越王接前南帝之統，保有朱鸞之地，初與桃郎乘時而稱王，卒與後李分國而共治。幸得龍爪之瑞，大破全梁之兵。奈何螺城之築未乾^⑧，鴉海之師隨溺，鵝毛之禍^⑨，是誰咎也。後南帝業承二兄，治踰四紀^⑩。然背義而滅趙，望風而降隋，遂成北狩之辱，由其自取也。

嗚呼，天命靡常，人心難信。前乎安陽王恃有龜爪之瑞，怠心一形而國隨以滅，後乎趙越王恃有龍爪之祥，驕心一生而國隨以亡。祥瑞之事，果何益哉。趙武帝使仲始托婚於安陽王之女，乃竊其龜爪，以伐安陽王，而取其國，則趙武帝之計險矣，而趙氏尋滅於漢。後南帝使雅郎托

娶於趙越王之女，乃竊其龍爪，以伐趙越王，而移其祚，則後南帝之術深矣，而李氏卒陷於隋。噫，滅人之國，人亦滅其國，天道昭昭，足爲明戒。

【和訳2】

鴻臚氏の涇陽王は、神農の後を継いで、洞庭君の娘を娶り、夫婦の道のなんたるかを明らかにし、風俗の根源を正した。君主は徳によって民を教化し、衣裳をたらし腕組みをしているだけで無為にして天下は治まった①。民は、田畑を耕し井戸を掘り、外出しては農作にはげみ、帰宅しては休息をした。それは炎帝のあの太古の風俗のようであった。

貉龍君は、鴻臚氏の天下を受け継ぎ、甌貉氏の娘を娶り、めでたくも百人の男児を授かる子宝に恵まれた。百越の祖先は、ここに起源を持つのだ。貉龍君在位の年数は最も長く、その富裕・長寿・多男は、前代未聞のことであった。

雄王は貉龍の位を継承し、徳政を施すことに務め、人民を平穩に過ごさせ、農作や養蚕などの仕事に専念させて、戦争のような危急の事態を起こさなかった。先代を継承した子孫たちもみな雄王を名乗り、歴代あわせて十八世、治世は二千年あまり続いた。繩の結び目で政令を伝え②、それでも人民は不正をおこなうことのない純朴な風俗であった。その後、雄王は身を持ち崩して、政務をおろそかにし、軍備を撤廃して気かけず、酒色に溺れて歡樂ばかりにふけた。蜀の軍隊が一度襲来するや、王権はたちまち瓦解してしまった。

安陽王は西方では巴蜀へ歩を進め③、南方では雄王を滅ぼし、螺城を首都とし、甌貉を版図とした。亀の爪でできた大弓を手に入れ、秦人の軍隊を撃退した。しかし戦勝に驕り、気を抜いてあなどり、趙氏の軍隊が襲来すると、その辺境の防備は破られてしまった。

趙武帝は秦の動乱に乗じて、五嶺以南を占領し④、番禺を首都とし、漢の高祖とそれぞれの持ち場で帝王を名乗った。民に対する仁愛の心を持ち、国を守る智略に長けていた。蜀の地を武功によって縮み上がらせ、象郡では文教を振興した。『詩経』『尚書』によって国の風俗を教え導き、仁義によって人心を団結させた。庶民に耕し植えることを教え、国は豊かになり軍隊は強くなった。漢朝がひとたび使節を遣わすと、趙武帝は極めてへりくだった応対をし、南朝と北朝とは互いに打ち解け、天下は無事、その治世は百年あまり、真に英雄と呼ぶにふさわしい才略にたけた君主であった。

文王は、武帝の嫡孫に当たることから、先代の大業を継承した。その制度・法令はすべて、先帝旧来のものを遵守し⑤、義理によって隣国を感化し、敵兵を撃退して国境を安定させた。文王とは先代の大業を継承・保持した君主である。

明王は徳高くあるべき王位を継承するや否や⑥、放縦な生活に溺れた。穆后が寵愛を受けて、越人の側室は見捨てられた。国中が友和せず、秩序は乱れに乱れた。

哀王は幼児であり、国家をきりもりする方法を知らなかった。哀王の母はわがままで放縦

な生活を送り、権臣が政治をおこなった。こうして趙氏政権は、衰亡の一途をたどった。

術陽王は哀王の兄という身分により、権臣の手によって国王に祭り上げられたが、思慮に欠け、強敵の襲来によって趙氏政権は滅亡した。哀王の災難は呂嘉に原因があるとは言え、もとをただせば明王が繆后を寵愛したことに端を発するのだ。女性の色香はこのように国家を転覆させる、深く戒めとすべきである。

徵王の一族は、雄王の末裔である。姉妹そろって勇氣と智略によって名を馳せた。民衆を苦しめる蘇定の政治に怒り、諸部族を糾合し、精兵を奮起させ、その威名を大いにとどろかせ、郡県もこれに呼応した。五嶺以南の六十五城を攻略して、南越元来の領土をみな回復した。徵王は、女性の中の豪傑である。しかし天は甌貉の地に福を下すことなく、漢兵に侵略されてしまった。もしも当時、英雄と呼ぶにふさわしい才略にたけた君主がいたならば、漢も大庾嶺を狙おうとはしなかつたらう。

士王は、孔子を生んだ魯国の遺風を身に着け、学問に通暁し、謙虚に賢人と交際した。『詩経』『尚書』によって国の風俗を教化し、礼儀・音楽によって人の心を立派にした。治世は四十年を越え、国内は安定した。しかし息子の士徽は、軽率にも士匡のことは信じて、軍備をおろそかにし、とうとう呂岱によって殺害された。

趙嫗は、九真郡の女性である。山中に仲間を集めて、都市を攻略し、諸部族もこれに追従し、挙兵は容易に成功した。徵王の事例のように五嶺以南を占拠するには至らなかった。趙嫗とは女性の中から現れた才略にたけた英雄である。

前李南帝は、天賦の聡明さを持ち、文武両道の奇才を備えていた。北方では蕭詧を駆逐し、南方では林邑を平定した。国号を作り、皇帝を名乗って尊称を定め、官僚制度を整備し、年号を制定した。このように帝王として計画した壮大な政策があった。ところが澈湖の戦いで壊滅的打撃を受け、陳霸先の侵略軍がのさばった。白牛の背に現れた予言^⑦、これも天命だったのだらう。

桃郎王は、前李南帝の兄である。残兵を集めて、一戦を交えたが敗れ、退却して野能を保持した。力量が足りなかったのだらう。

趙越王は前李南帝の天下を受け継ぎ、朱鸞の地を保有した。当初は桃郎王とともに時勢に乗じて王を名乗り、結局、後李南帝と国土を分割して共同統治した。龍の爪を手に入れる瑞祥に恵まれ、梁の全軍を大いに撃破した。ところが螺城を建築しその土がまだ乾かないうちに^⑧、趙越王の軍隊は大鴉海でもう溺死してしまった。娘が鸞鳥の毛を道標にして敵に行先を伝えた厄災は^⑨、誰のあやまちか。

後李南帝の大業は、二人の兄の後を継いで、治世は四紀四十八年を越えた^⑩。しかし道義に背いて趙氏を滅ぼし、形勢を見て隋に降伏し、とうとう北方へ連行される屈辱をなめた。ただしそれは自業自得なのである。

まったく、天命はいつまでも続きはしない、人の心はあてにならない。先の例では、安陽王が亀の爪の祥瑞に頼って、怠け心を一度起こすと国はもう滅亡してしまった。後の例では、趙越王が龍の爪の吉祥に頼って、驕る気持ちを一度起こすと国はもう消滅してしまった。めでたい事があっても、結局なんの役にも立ちはしない。趙武帝は、息子の仲始をやって安陽王の娘へ求婚をさせ、なんとその亀の爪を盗み出させ、これによって安陽王を討伐し、国を奪取した。つまり趙武帝の計略が陰険であったのだ。そしてその趙氏も間もなく漢に滅ぼされた。後李南帝は、息子の雅郎に趙越王の娘へ結婚の申し込みをさせ、なんとその龍の爪を盗み出して、これによって趙越王を討伐し、その天運を引き寄せた。つまり後李南帝の術数が念入りだったのだ。そしてその李氏も最後には隋に攻略されてしまった。ああ、他国を滅ぼした者は、今度は自国を滅ぼされる。天理は明々白々であり、教訓とすべきだ。

【注2】

- ①垂衣拱手 『尚書』武成に「垂拱而天下治（垂拱して天下治まる）」とある。
- ②結繩 『易』繫辭下伝に「上古結繩而治（上古は結繩して治まる）」とある。
- ③徙 陳本・正和本は徙につくる。孫本は徒に誤る。
- ④嶺表 陳本・正和本は嶺表につくる。孫本は領表に誤る。
- ⑤先王成憲 『尚書』説命下に「監先王成憲，其永無愆（先王の成憲に^{かんが}監みれば、其れ永く^{なが}愆^{とが}無し）」とある。
- ⑥嗣徳 『尚書』康王之誥に「王義嗣徳（王は義もて徳に嗣ぐ）」とある。
- ⑦白牛之書 『大南国史演歌』（ベトナム国家図書館R.303）の第十六葉上欄に「先是有黒牛生白犢，背上有文曰，日附木来。至是陳伯先来侵，果驗云。出野史（先には是れ黒牛の白犢を生む有り，背上に文有りて曰わく，日附木来と。是に至りて陳伯先 来侵す，果たして驗ありと云う。野史に出づ）」とある。⊃日木を合わせると陳字になる。つまり陳が来るという予言を意味する。
- ⑧螺城 安陽王三年【前255】に、安陽王が金亀の加護によって螺城を築いたとある。武瓊『越鑑通考』では、趙越王が螺城を築いたことになっていたと思われる。越史の後李南帝元年【571】に「勤按，旧史載趙越王…与蜀安陽王・趙仲始之事，如出一轍（勤んで按ずるに，旧史の載せる趙越王…と蜀の安陽王・趙仲始の事とは，一轍に出づるが如し）」とあり，両者の故事の類似が指摘されている。『嶺南摭怪列伝 卷三・統類』（『越南漢文小説叢刊』第二輯第一冊，学生書局・1992年）の「龍爪却虜伝」（120頁）には「王入拋龍編城，更詔遷禄螺・武寧二城…。南帝既追越王，乃還螺城・武寧二処（[趙越]王入りて龍編城に抛り，更に詔して禄螺・武寧の二城に遷る……。南帝既に越王を追い，乃ち螺城・武寧の二処に還る）」とあり，趙越王と螺城を結びつける故事が存在したことを思わせる。
- ⑨鵝毛 安陽王四十八年【前210】は、鵝毛を安陽王の娘・媚珠の物語とする。武瓊『越鑑通

考』は、趙越王の娘・杲娘の物語としていたと思われる。(3)【2】⑧の「龍爪却虜伝」は、鵝毛を杲娘の故事とする。

⑩四紀 (2)【4】の紀年目録では、後李南帝の治世は三十二年となっていた。

【原文3】

梅黒帝起自驩州，忿楚客之虐政，舉兵攻之，南據海嶺，北距李唐，可謂豪傑之主也。惜其禦寇非才，人心寡助①，而不能遏楊思勳之亂也。馮布蓋以唐林之英豪，惡正平之苛虐，兄弟乘時屈起，拯民撥亂，布德立功，可謂仁厚之主也。惜其子安不能嗣守，見立於破靳②，迎降於趙昌，雖有杜英翰謀國之臣，亦無救乎馮氏之亡也。曲先主世爲巨族，雄睿智略，因唐之亡，群心愛戴，共推爲主，都于羅城，民安國治，功德永垂，享年弗久。曲中主克承先業，綽有祖風③，運籌決勝，出人意表，與北朝諸國而抗衡，爲我越之令主，定府籍・管甲之職④，制度稍立，中道崩殂。至於後主，瀆於干戈，賦繁役重，百姓怨嗟，尋爲南漢所滅。楊正公念我越土宇，久爲南漢所併，收用豪傑，大興義旅，兩敗賊將，盡復輿圖⑤。然備患無謀，更爲義兒所弑。吳先主誅公羨之賊臣，破弘操之勍敵⑥，置文武百官之階，定律令衣服之制，眞濟世之奇才也。然顧托非人，禍及後嗣。楊三哥以外戚之親，受托孤之寄，然廢主自立，難逃篡弑之誅。吳後主克復祖宗之業，保安境內之民，足爲承平之主。然政尙姑息，黷於武功，禍及其身。天策王以先主之嫡嗣，始爲奸臣所篡，而不能正其罪，終以南晉所逼，而不能讓其功，擅作威福之權，竟失友于之義。皆庸才之主也。嗟夫自有天地，卽有綱常，父爲子綱，君爲臣綱，萬古截然，而不可紊。彼矯公羨乃楊正公之義兒，忘其豢養之恩，率其黨而殺正公，是以子而殺其父，竟爲先主所誅。三哥乃吳昌岌之舊臣，背其顧托之言，逐其君而自立，是以臣而叛其君，又爲後主所戮。亂賊之輩，生前則不容天地之間，沒後則難逃春秋之法。故史臣筆之『通鑑』⑦，深致意於其間焉。吳氏旣亡，十二使君乘時蜂起。吳日慶據唐林，李朗公據超類，矯順據洄湖，吳南帝據夜澤，阮超據扶烈，范防遏據藤州，陳明公據長州，吳昌熾據平橋，矯公罕據峰州，阮太平據三帶，杜景碩據杜洞，阮守捷據仙遊。各守封域，莫能相攝。世道至此，風俗澆漓甚矣。何則十二使君，皆吳王之舊臣。當後主親征唐阮，爲毒矢所中而殂，爲臣下者，固宜復讎致討，而雪後主之恥可也。亦當圖立嗣君，以繼先主之統可也。胡乃君旣遇害，臣皆忍心，各相雄長，僭僞紛紜，非惟得罪於當時，抑亦貽譏於後世。卒爲丁先皇所定，固其宜也。故史臣於十二使君以前，著爲外紀，以別內外之分。自丁先皇以後，著爲正統，以明君臣之分。世道升降之幾，於此可以見矣。

【和訳3】

梅黒帝は驩州を拠点として、元楚客の残虐な政治に憤り、挙兵して彼を攻撃した。南方では海嶺を占拠し、北方では唐朝に抵抗した。豪傑の君主と言うべきだ。欠点は、侵略を防ぐ

能力を欠き、人心が離反し協力を得られなかった点だ①。こうして楊思勳の兵乱を阻止することができなかった。

馮布蓋は、唐林出身の英雄豪傑であり、高正平の残忍さを憎み、兄弟で時勢に乗じて決起した。人民を救済して動乱を鎮め、徳政を布いて武功を立てた。仁愛にあふれ寛大な君主であったと言える。欠点は、息子の馮安が跡目を守り切れなかった点で、蒲破勒によって擁立され②、趙昌を迎え入れて降伏した。杜英翰という国家をきりもりする臣下がいたけれども、それでも馮氏の滅亡を救えなかった。

先主の曲顛は、代々続く豪族の出身であった。勇猛さと叡智とを兼ね備え、すぐれた計略を繰り出した。唐王朝が滅亡すると、大衆から支持を受け、君主に推戴された。羅城を首都とし、人民は安寧に暮らし、そして国はよく治まった。その功績は後世へ永遠に伝わるものだが、その天寿は短かった。

中主の曲承美は、先代の業績をよく受け継ぎ、先祖の遺風を伝える気品ある物腰をしていた③。策謀をめぐらし勝利を得ては、人の意表をつき、北朝の諸国に対抗した。我が越国の立派な君主であった。戸籍・管甲の職を定めて④、制度がやや軌道に乗ったところで、道半ばにして崩御した。

後主は戦争を甘く見て、あれこれと税金を取り立て、重い労役を課したので、百姓からは怨嗟の音があがった。間もなくして南漢に滅ぼされた。

楊正公は、我が越国の領土が、南漢に長らく併呑されたままであることを忘れず、豪傑を仲間に加え、大々的に義兵を挙げ、二度にわたって賊将を撃破し、版図をすべて回復した⑤。しかし紛争に備えるも対策が足りず、養子に殺害された。

先主の呉権は、賊臣矯公羨を誅殺し、強敵劉弘操を撃退した⑥。文武百官の階級を設け、律令・服飾制度を定め、真に救世の奇才であった。しかし悪人を重用し、その災禍は子孫にまで及んだ。

楊三哥は、外戚であることから、遺児の後見を託されたが、主君を引きずりおろして自ら王を名乗った。篡奪・弑逆の罪による誅殺から逃れられはしない。

後主の呉昌文は、先代の大業をよく再興し、国内の人民を守り、太平を実現できるはずの君主であった。しかし政治はその場しのぎばかりで、武功を飽くことなく求めたため、その災禍は自身にも及んだ。

天策王は、先主呉権の長男であった。奸臣による篡奪に遇うも、処罰することすらできなかった。最後は南晋王から要求されてもその功業を譲ることができず、権力をかさに着て、とうとう兄弟は仲違いした。まったくもって凡庸な君主であった。

ああ、天地が生まれてすぐに、三綱五常はできた。父親とは子供の従うべき道であり、君主とは臣下の従うべき道であることは、大昔からはっきりしており、乱してはならないこと

だ。あの矯公羨は、なんと楊正公の養子でありながら、その扶養の恩義を忘れ、仲間を率いて楊正公を殺した。これは子供が父親を殺したのであり、結局は先主呉権に誅殺されることになった。楊三哥はなんと呉昌岌の老臣でありながら、後見を託した遺言に背いて、君主を放逐して自ら王を名乗った。これは臣下が君主に叛逆したのであり、彼もまた後主の呉昌文に殺されることになった。叛乱を起こす輩は、存命中は世の中に許容されず、死後は史家の筆誅から逃れられない。つまり史臣はこれらの事件を『大越通鑑』に記録して⑦、ある判断を文中に慎重に込めたのである。

呉氏政権が減んで、十二使君たちが時勢に乗じて蜂起した。呉日慶は唐林を根拠とし、李朗公は超類を根拠とし、矯順は洄湖を根拠とし、呉南帝は夜沢を根拠とし、阮超は扶烈を根拠とし、范防遏は藤州を根拠とし、陳明公は長州を根拠とし、呉昌熾は平橋を根拠とし、矯公罕は峰州を根拠とし、阮太平は三帯を根拠とし、杜景碩は杜洞を根拠とし、阮守捷は仙遊を根拠とした。各人が自分の縄張りを守って、これを統率できる者はいなかった。社会情勢がこうなると、世情もずいぶん酷薄になった。なぜか。十二使君は、みな呉王の旧臣であった。後主の呉昌文は自ら唐阮を討伐に出向き、毒矢に当たって死んだ。臣下たる者、当然復讐すべく討伐の兵を起し、呉後主の恥を雪ぐのがよろしい。また王子を即位させるよう取り計らい、先代の天下を継承させればよろしい。それがどうして君主が殺害されたのに、臣下はみな意に介さず、各自覇を唱え、僭主としてあちらこちらに割拠したのか。これでは当時罪を犯しただけに止まらず、さらに非難は後世まで続くことになる。とうとう丁先皇によって平定されたのは、確かに好ましいことであった。だから史臣は十二使君以前を外紀に記録し、これによって外紀・内紀の違いを区別したのだ。丁先皇以後を、正統として記録し、これによって主君と臣下の違いを分明にしたのである。社会情勢が盛衰する画期を、ここに見て取ることができる。

【注3】

①寡助 『孟子』公孫丑下に「得道者多助，失道者寡助（道を得る者は助け多く，道を失う者は助け寡し）」とある。

②破斬 陳本は破斬につくった上で、蒲破勤を指すとして、破勤に改める。正和本・孫本は、破斬につくる。『嶺南摭怪列伝 卷三・続類』（『越南漢文小説叢刊』第二輯第一冊）の「馮布蓋大王伝」（121頁）は蒲破勤につくる。しかし『粵甸幽霊集録』（『越南漢文小説叢刊』第二輯第二冊）の「布蓋孚祐彰信崇義大王」（22頁）は、蒲披勤につくる。『越甸幽霊集録全編』（『越南漢文小説叢刊』第二輯第二冊）の「孚祐彰信崇義大王」（176頁）は、蒲破勤につくる。このように蒲破勤・蒲披勤・蒲破勤と異なる表記が見られる。ひとまず正和本の表記に従い破斬とする。

③綽有祖風 『旧唐書』魏謩列伝に「宣宗毎曰，魏謩綽有祖風（宣宗毎に曰わく，魏謩は綽とし

て祖風有り)」とある。

④府籍管甲 『大越史記全書』に、曲承美が府籍・管甲の職を定めたという記載はない。越史の唐・天祐四年〔907〕に曲顥の業績として、「造戸籍，編記姓名郷貫，甲長帥之（戸籍を造り，姓名・郷貫を編記して，甲長が之を帥^{ひき}いる）」とあり，注に「『安南紀要』曲顥…改各県郷為甲、置管甲・副知甲，掌征税（『安南紀要』に曲顥は…各県郷を改めて甲と為し、管甲・副知甲を置きて，征税を掌らしむ）」とある。『安南志略』卷十四・官制は，世襲郷邑官の項目に管甲を載せる。

⑤輿圖 陳本は輦圖につくった上で，輿圖に改める。正和本は輦圖につくる。孫本は輦圖につくる。輦は，輿の別体であるが見なし，陳本に従い輿圖とする。

⑥勅敵 陳本は勁敵につくる。正和本・孫本は勅敵につくる。正和本にしたがい勅敵とする。

⑦通鑑 武瓊『大越通鑑』のことを指す。(3)【1】では越鑑通考と呼ばれているが，(1)【3】では大越通鑑と呼ばれていた。また洪順三年〔1511〕には「進『大越通鑑通考』（『大越通鑑通考』を進む）」とある。大越通鑑・越鑑通考・大越通鑑通考は異名同書の関係にある。(3)【1】⑦を参照のこと。

【原文4】

丁先皇因吳國之喪亂，平十二使君，天與人歸^①，輿圖混一^②。任丁佃・阮匐・劉基・鄭琇之儔，爲之輔佐，制朝儀^③，定立軍旅，我越正統之君，實自此始。論其平戎破敵，功則偉矣。然宗廟未立，學校未建，設鼎養虎以爲刑獄之具，遺犀納象徒爲貢獻之勞，禮樂刑政之不修，重門擊柝之不謹，卒使身弑國危，禍及其子，是防微杜漸之無謀也。少帝以幼冲之年，嗣艱大之業^④，國家多難，社稷傾危，加以占寇擾其南，宋師侵其北，權臣攝政，國內離心，丁氏訖錄，是保邦制治之無策也^⑤。蓋丁氏之興，雖出於天數，及其衰也，由三綱之不正焉。先皇廢嫡立少，而父子之恩睽。五后竝立，而夫婦之倫紊。寵任杜釋，以成篡弑之禍，而君臣之道喪。是則丁氏之興，由於先皇，丁氏之亡，亦由於先皇。非天命之不佑，蓋人謀之弗臧也。

黎大行擁十道之權，行居攝之事，主少國危，乘時受命。誅占城主以雪執使之恥，摧趙宋師以挫必勝之謀。用洪獻・巨倆・徐穆・子安之流，爲之左右。耕籍田於龍隊^⑥，徵處士於象山^⑦。選用賢良，創立學校，有帝王之大略。然土木繁興，以金玉而飭其宮室，干戈屢起，以草芥而視其人民。雖欲不衰，其可得乎。中宗奉大行之遺詔，入承國統，赦母弟篡弑之罪，而政失於柔懦。卧朝不君，弑兄虐衆，以火焦・刀鋸而爲刑，以木杪・水牢而爲獄^⑧。溺亂女色，伐性傷生。雖欲不亡，其可得乎。蓋大行之興，雖出於衆心，及其亡也，亦由三綱之不正焉。大行廢丁皇之子，而降爲衛王，則無君臣之義。生子有九，而不早定皇儲，則無父子之恩。立后有五，而上蒸丁后，則無夫婦之道。知有欲而不知有義，知有身而不知有子，好殺而不好生，好刑而不好德，身既亡而國隨滅，由不仁之積也。

【和訳4】

丁先皇は、呉氏の国家が混乱に陥る中、十二使君を平定したことによって、天は使命を与え民は身を委ね①、国土は統一された②。丁佃・阮匄・劉基・鄭瑋らを信任し、彼らを輔佐とした。朝廷の礼儀を制定し③、軍隊を整備した。我が越国の正統の君主というのは、実はこちらから始まったのである。異民族を平定し、敵軍を撃破したことについては、その功績たるや偉大なものである。しかし宗廟が立てられることはなく、学校もまだ設置されなかった。鼎を置きまた虎を飼い、これを刑罰の道具とした。サイやゾウを贈り物として、むだな進貢の骨折りをした。礼儀・音楽や刑法・政令はおろそかにされ、複数の城門での検問を通過してようやく参内できる仕組みや、拍子木を打って警備することも行き届かなくなり、とうとう臣下に殺され国家は危機に陥り、厄災はその子供にも降りかかった。これは悪の芽を摘むという展望がなかったためである。

廢帝は幼少にもかかわらず、大変困難な事業を継承した④。国家は多くの困難に直面し、転覆の危機にあった。さらには占城の賊軍が南方をかき乱し、宋の軍隊が北方を侵略した。権力を握った臣下が政治を執り、国内は団結せず、丁氏の天命は尽きた。これは国を守り統治する政策がなかったのである⑤。

思うに丁氏が勃興したのは天命によるのだろうが、その衰退は三綱を正しく守らなかったせいである。丁先皇は、長男を後継ぎからはずして、末子を皇太子の地位に即けることで、父子間の恩情を断絶させた。五名をそろって皇后の地位につかせることで、夫婦間の倫理を乱した。杜積を寵愛して重用し、篡奪・弑逆の災禍を招いたことで、君臣間の道義を失わせた。つまり丁氏が勃興したのも丁先皇のおかげなら、丁氏が滅亡したのもまた丁先皇のせいである。天命の加護がなかったわけではない、つまり人間の発想が善くなかったのである。

黎大行は十道將軍として権力を振るい、摂政として事に当たった。主君は幼少で国家は危機に瀕しており、こうした時勢に乗じて天命を受け皇帝となった。占城の君主を討伐して、使者を捕縛された恥を雪いだ。宋の軍隊を撃退して、その必勝の計略を失敗させた。洪猷・巨倆・徐穆・子安らを起用し、彼らを取り巻きとした。龍隊で籍田を耕し⑥、象山から隱者を招いた⑦。善良で有能な人物を選んで起用し、また学校を創設したことは、帝王として遠大な計画を具えていた。しかし土木工事を頻繁におこない、その宮殿を金玉で飾り立てた。戦争がしばしば起こり、民衆を塵芥のように扱った。これでは没落を避けたくても、避けようがない。

中宗は、黎大行の遺言をうけ、王権を継承した。母と弟が篡奪・弑逆をくだてたのにその罪を赦すなど、その政治はあまりに軟弱すぎた。

臥朝は君主としての道を踏み外し、兄を弑逆し民衆を殺害した。火あぶり・八つ裂きを刑罰とし、木のこずえ・水牢を監獄とした⑧。女遊びに溺れ、心身を傷めつけ命をすり減らし

た。これでは滅亡を避けたくても、避けようがない。

思うに黎大行が勃興したのは民衆の支持によるのだろうが、その滅亡はまたも三綱を正しく守らなかったせいである。黎大行は、丁先皇の子息を引きずりおろして衛王へ降格させ、君臣間の義理を台無しにした。九人の子供をもうけたが、すぐに皇太子を定めず、父子間の恩情を台無しにした。五人の皇后を立て、しかも目上である丁先皇の^{きさき}后と姦通し、夫婦間の道義を台無しにした。欲望を果たすことだけを気にかけて、仁義を果たすことを気かけない。自身のことばかり気にかけて、子供のごことは気かけない。人殺しが好きで生かすことを厭う。処刑を好み徳政を厭う。自身が死んで国も滅んだ。不仁を積み重ねたせいである。

【注4】

- ①天与人帰 (3) 【1】 ③を参照のこと。
- ②輿圖 陳本は輿圖につくる。正和本・孫本は輿圖につくる。(3) 【3】 ⑤を参照のこと。
- ③舩 陳本・正和本は舩につくる。孫本は創につくる。
- ④艱大 『尚書』大誥に「爾庶邦君，越庶士御事，罔不反曰艱大（^{なんじ}爾庶邦の君，^{およ}越び庶士御事，反して艱大なりと曰わざる罔からん）」とある。
- ⑤保邦制治 『尚書』周官に「若昔大猷，制治于未乱，保邦于未危（若れ昔大猷，治を未だ乱れざるに制し，邦を未だ危うからざるに保つ）」とある。
- ⑥龍隊 天福八年【987】は隊山とする。史略も隊山とする。
- ⑦象山 興統四年【992】は宣華山とする。
- ⑧木杪水牢 景瑞二年【1009】に，捕虜を木に登らせ，その木を切り倒して殺したり，引潮の時に水牢に入らせ，満潮で溺死させたりしたとある。

【原文5】

李太祖因卧朝之失徳，協震文之休祥①，應天順人②，乘時啓運，有寛仁之大度，有宏遠之規模，遷都定鼎，敬天愛民，田租有賜，賦役有制，南北通好，天下晏然。然聖學不聞，儒風未振，僧尼半於民間，佛寺滿於天下，非創業垂統之道也③。太宗勇智兼全，征伐四克，有孝友之徳，習禮樂之文，討賊平戎，勸農耕籍，伸冤有鍾，制刑有律，爲守成之令主也。然耽僊遊詩偈之禪，惑西天歌調之曲④，非經國子民之道也。聖宗恤民重農，柔遠能邇⑤，置博學之科⑥，重養廉之令，祕閣之有其官，明倫之有其制，文修武備，海内謐寧，爲嗣徳之賢君也。然疲民力以築報天之塔，費民財以造霽潭之宮，此其短也。仁宗天資仁孝，稱爲盛徳，重名臣之選，置進士之科⑦，侍經筵之有其官，開言路之有其詔，求賢納諫，薄賦輕徭，故能身致太平，俗臻殷富，足爲承平之令主也。然開覽山宴，而聽母后之盤游，鑄龜田鍾，而陷僧尼之竇惑，此其失也。神宗修政立事，任賢使能，設宏詞之科⑧，定兵農之令，政則勤矣。然酷好祥

瑞，崇尚浮屠，破敵而歸功於佛，獻鹿而得濫其官，何其愚也。英宗設講武之場，以嚴武備。修孔子之廟，以振文風。籍田有耕，園法有立，治則詳矣。然儉邪莫辨^⑨，賞罰不明，寵任奸臣，而開象脚之路^⑩，崇信佛老，而制僧道之科，何其暗也。高宗初年，專任蘇憲誠・李敬脩之賢臣，共圖政治，賑貧有令，求賢有詔，故天資嘉瑞以前，其政猶有可觀。至天嘉寶祐以後，土木蠲興，盜賊蜂起，而亡國之兆已萌於此矣。惠宗耽縱荒淫，委政蘇忠嗣・陳慶餘之權臣，君弱臣強，天怨人怒，政暴刑繁，民窮盜起，而喪國之兆已決於斯矣。加以昭皇女主，負荷不堪^⑪，陳氏因之以移李祚，可勝惜哉。

抑又論之，李朝之時，世更八帝，傳祚二百餘年，所可稱者太祖有帝王之量，太宗有智勇之資，聖宗有愛民之仁，仁宗有惠民之德。然太祖立后者三，情牽於愛，而家道不正^⑫。太宗制峰有五，當哀而樂，而孝道以虧。聖宗蹈太祖之轍，而立后過制。仁宗惑生母之言，而幽殺嫡母。至於禁嫁百官之女，則神宗溺亂女色之迷也。愛養淫亂之臣，則英宗嬖寵儉人之過也。高宗以荒淫爲樂。惠宗以酒色自娛。帝王修齊治平之道，果如是乎。在朝之臣，則有李道成之托孤，蘇憲誠之輔政，彷彿乎伊尹・周公之忠愛，固可嘉矣。至於陶甘沐・陶碩輔・梁任文・陶處中・李道紀・廖嘉貞・金英傑・曹良翰・楊景通・魏仲弘・劉禹儼・李公平・黃義賢・李敬脩之諸彥，不能正其君以成俗^⑬，宜其治之不古若也。他如杜英武之驕淫，譚以蒙之暴橫，何足道哉。

【和訳5】

李太祖は、臥朝皇帝の悪行をきっかけに、落雷の痕跡に現れた予言の通り^①、天命に応じ民心に従って^②、時勢に乗じて命運を切り開いた。寛容で仁義を通す度量があり、遠大な展望があった。遷都して国都を定め、天命と真摯に向き合い人民を愛護した。年貢を分け与え、賦役には規律があった。南の我が国と北の中国とは通好し、天下は太平であった。しかし孔子の学問は広まらず、儒学の伝統はまだ盛んでなかった。民間の半分が僧侶・尼僧であり、仏寺が天下に満ち満ちていた。これは建国してそれを次代へ伝える道ではなかった^③。

太宗は勇猛さと智略を兼ね備え、出征しては四度勝利を取め、父母には孝行を尽くし、兄弟とは友愛をもって接する、そうした徳の持ち主であった。礼楽制度を学び、逆賊を討伐し異民族を平定した。農業を奨励して籍田を耕した。鐘樓を建てそこから冤罪の訴えを聴き、刑法を制定して規律があった。先代の大業をよく継承した立派な君主であった。しかし仙境に遊び詩偈を作って仏教に耽溺し、天竺の歌謡に夢中になったのは^④、国を統治し人民を愛護する道ではなかった。

聖宗は人民を救済し農業を重視した。遠方の民を安心させ、近隣の民も平和に過ごさせた^⑤。博学の科目を設置し^⑥、汚職を防ぐべく俸給を増額した。秘閣には官僚が居並び、明堂では制度が維持された。文教は整備され軍備もそろい、国内は安寧、美德を継承した賢君で

あった。しかし、人民の体力を疲弊させて報天の宝塔を建立し、人民の財力を浪費させて靈潭の行宮を建造したのは、欠点であった。

仁宗は天賦の仁愛と孝順を具え、人格者として称えられた。名臣となりうる人物を選抜すべく、進士の科目を設置した⑦。官僚に進講させ、活発に進言するよう詔を下した。賢人を求めて諫言を聞き入れ、年貢も労役も軽く、これにより太平の世を実現し、世間は裕福になった。太平を受け継いだ立派な君主だったと言える。しかし覽山寺で宴を開き、母後の遊興を許し、亀田の鐘を鑄造し、僧侶・尼僧の口車に乗せられた。それは失態であった。

神宗は公明な政治をおこない功業を成し遂げ、賢人を任用し才能ある者を取り立てるべく、宏詞の科目を設置し⑧、兵士を帰農させる法令を定めた。その政治は力を尽くしたと言える。しかし吉祥をとっても喜び、仏教を崇拜して、敵を破った功績は仏のお蔭にしてしまい、鹿を献上しただけで官職を手に入れることができた。なんと愚かしいことだろう。

英宗は演武場を設置して、軍備を整えた。孔子廟を建てて、文教を振興した。籍田を耕し、貨幣制度を定め、その政治はきめ細やかだった。しかし悪人の見分けがつかず⑨、賞罰の基準も明確でなかった。奸臣を重用して、象脚の路を開いてしまった⑩。仏教と道教を崇拜して、僧道の科目を制定した。なんと道理に暗いことか。

高宗は即位したばかりのころ、蘇憲誠・李敬脩らの賢臣をいちずに信任し、共に政治を執りおこなった。貧民に施す法令を出し、賢人を求める詔勅を下した。だから天資嘉瑞以前は、その政治にはまだ観るべきところがあった。しかし天嘉宝祐以降は、土木工事をハリネズミの毛のように一斉に起こし、盗賊が蜂の巣をつついたようにあちこちで起こった。亡国の予兆はすでにここに芽吹いていたのである。

恵宗は度を過ぎて酒色に溺れ、政治を蘇忠嗣・陳慶餘らの権臣に任せきりにした。君主は弱く臣下は強く、天は憎悪し民は憤怒した。政治は横暴で刑罰を頻繁に下した。人民は窮乏して盗賊が起こった。ここに国家滅亡の予兆は決定的なものとなった。

さらに昭皇女主は、重責に堪えられず⑪、これにより帝位は李氏から陳氏へと移った。残念至極である。

さてもう一度この事を論じよう。李朝の時代は、歴代八帝を数え、帝位の継承は二百年あまりであった。称賛すべき人物と言え、太祖には帝王の度量があり、太宗には智勇の資質があり、聖宗には人民を愛護する仁徳があり、仁宗には人民を思いやる徳性があった。しかし太祖は三人も皇后を立て、心は愛欲に振り回され、家庭を営む規範から逸脱していた⑫。太宗は五峰に登頂し、哀しむべき時に楽しみ、親不孝をした。聖宗は太祖の失敗を繰り返して、制度以上の皇后を立てた。仁宗は生母の言葉に惑わされ、父の正妻を幽閉して殺した。官僚の娘に結婚を禁じたのは、神宗が女色に溺れたせいである。淫乱な臣下を育ててしまったのは、英宗が悪人を重用したせいである。高宗は放蕩を楽しみとした。恵宗は酒と女を飲むと

した。帝王の修身・齊家・治国・平天下の道は、果たしてこのようなものだろうか。朝臣のうち、李道成が幼帝を託され、蘇憲誠が政治を補佐したのは、伊尹・周公の忠愛を彷彿とさせ、当然賛美すべきだ。陶甘沐・陶碩輔・梁任文・陶処中・李道紀・廖嘉貞・金英傑・曹良翰・楊景通・魏仲弘・劉禹偁・李公平・黃義賢・李敬脩らの英才たちは、立派な風俗を形成することで君主を正しい道へ戻すことができず^⑬、その政治が古風でなくなるのも当然であった。その他の杜英武の放蕩・譚以蒙の横暴は、言及するまでもない。

【注5】

- ①震文 景瑞二年【1009】に、木綿の樹に雷が落ち、その落雷の痕跡が、李氏の勃興を予告する文章になっていたとある。
- ②応天順人 『易』革に「湯武革命，順乎天而応乎人（湯武 命を革めて、天に順い人に応ず）」とある。
- ③創業垂統 『孟子』梁恵王下に「君子創業垂統，為可繼也（君子は業を創め統を垂れ，継ぐべきを為す）」とある。
- ④惑 陳本・正和本は惑につくる。孫本は感に誤る。
- ⑤柔遠能邇 『尚書』顧命に「柔遠能邇，安勸小大庶邦（遠きを柔げ邇^{ちか}き能くし，小大の庶邦を安んじ勸ませ）」とある。
- ⑥博学之科 龍瑞太平二年【1055】の前にある聖宗に対する評にも「置博士科（博士の科を置く）」とある。しかし聖宗の時代には神武二年【1070】に「修文廟（文廟を修す）」と記録があるのみである。次代の仁宗の太寧四年【1075】に「詔選明經博学（詔して明經博学を選ぶ）」とある。『越鑑通考』には聖宗が博学科を設けたとの記載があったのだと見なせる。
- ⑦進士之科 (3) 【5】⑥で指摘したように、仁宗の太寧四年【1075】には「詔選明經博学（詔して明經博学を選ぶ）」とあるが、進士科についての記載はない。『越鑑通考』には仁宗が進士科を設けたとの記載があったと見なせる。
- ⑧宏詞之科 『大越史記全書』には、神宗が宏詞科を設けたとの記載はない。『越鑑通考』には、神宗が宏詞科を設けたとの記載があったと見なせる。
- ⑨儉邪 陳本・正和本は儉邪につくる。孫本は儉邪に誤る。
- ⑩象脚 越本1は、盲人が象の脚をまさぐる、つまり疑心暗鬼という意味だとする。越本2は未詳とするが、文脈からして杜英武と黎太后の姦通を言うのではないかと指摘する。
- ⑪荷 陳本・正和本は荷につくる。孫本は苛に誤る。
- ⑫家道不正 『易』家人に「父父，子子，兄兄，弟弟，夫夫，婦婦，而家道正。正家而天下定矣（父は父たり，子は子たり，兄は兄たり，弟は弟たり，夫は夫たり，婦は婦たり，而して家道は正し。家を正しくして天下は定まる）」とある。

⑬成俗 『礼記』学記に「君子如欲化民成俗，其必由学乎（君子如し民を化し俗を成さんと欲せば，其れ必ず学に由るか）」とある。

【原文6】

陳太宗應天命之歸，受昭皇之禪，有仁厚之德，有簡重之容，討叛保民，設科取士。宰相則擇宗室賢能①，朝典則定禮儀刑律，陳家制度由此而興。然閨門慙德②，踵於唐太之昏風。聖宗有仁恕之心，有孝悌之德，仁親睦族，尊賢重道，侍經筵則擇其賢良，輔東宮則選其德行，陳家基業由此而固。然釋教耽心，流於梁武之弊習。仁宗得聖賢之精，有金僊之相，體質渾全，慈仁和易。下詔賑貧而民心益固，選將禦戎而元寇以平，重興事業，昭映千古，足爲陳家之賢君。然遊心釋典而築天健之庵，給養僧尼而鑄普明之鼎，非帝王之治也。英宗定朝班文武之階，制士人科舉之式，大旱則錄囚，大飢則賑貸，治急養民，政先風憲，文物制度，渙然一新，亦足爲陳家之令主。然從沙門於安子之山③，勞民力於映雲之閣，非帝王之量也。明宗天性謙沖，受英宗讓，遊神於翰墨之娛，馳筆於水雲之集，勸賢有詩，嗜酒有戒，似可稱矣。然官制冗多，刑獄冤濫，輕信克終之奸，以致國瑱之死，豈不爲聰明之玷乎。憲宗天資英睿，運撫承平，撰御書則有集，教皇子則有詩。隨朝學士之定其令，著作典雅之有其官。築石堤以防水患，立倉漕以賑流民④，亦可嘉矣。然逍遙於甘露之峰⑤，勤懇於瓊林之佛⑥，逐日博戲以爲娛，頻年災異而不覺，豈不爲人明之累乎。裕宗至性聰敏，學問高明，武備文修，四夷賓服。紹豐・大治之時，政事悉舉，似可取矣。然而晚節信任鄒庚，縱聚麀之欲⑦，開賭博之場，荒游無度，飢饉荐臻，陳家之業由此而衰。藝宗削平內難，光復舊物，有敬天愛民之實，有保邦制治之規，僊遊有取士之科⑧，葆和有餘暇之集⑨，定國朝禮儀之制，除沙州截脚之令⑩，規模功烈⑪，炳彪宇宙。然恭儉有餘而剛斷不足，外而占寇侵逼京畿，內而逆胡窺竊神器，陳家之業由此而亡。睿宗受禪之初，留心圖治，選將練兵，設科取士，帝箴有制，皇訓有書，似可有爲⑫。然寵任外戚，以啓奸臣僭竊之謀。拒黎錫忠諫之疏，聽子平詭奏之言。親征占城，輕入倚忙之洞，忿兵取禍，卒殞其身。簡皇童心益甚，秉德不常，運寶貨以臧天健之山，頒旗劍以厚季犛之賜，禦寇無謀，威令不振，卒使蒲黃得志，而資福見囚。順宗聽命權臣，徒擁虛器，金甌之役未罷⑬，石城之宴方醞⑭，列侯就誅，至靈歸隱⑮，卒使赤髯橫行⑯，而玉清見逼。少帝以幼冲之年，廢立之權出於胡季犛之口，而陳家之祚亡矣。

抑又論之，陳家歷代凡十二帝，享國一百七十餘年。所可稱者，太宗有帝王之量，聖宗有仁厚之德⑰，仁宗有重興之功，英宗有達孝之實⑱，明宗有文治之體，藝宗有恢復之績。然惠宗見弑而君臣之道喪，仁者不爲也。靈慈見娶而夫婦之恩乖，義者不爲也。以堂堂之天子而爲竹林之禪⑲，智者不爲也。以肅肅之王姬而爲占城之配，禮者不爲也。親迎其子之妻，則倫之亂矣。嬖幸倡人之女，則禍之胎矣。後宮苑池之遊⑳，則志荒矣。外戚權臣之寵，則政蠹矣。帝王修齊治平之道，果如是乎。在朝之臣，則有日燭建鹹子之功，國峻獻白藤之捷，亦頡頏於郭

汾陽・寇萊公之名譽，固可稱矣。至於陳光啓・馮佐周・陳元旦・范五老・段汝諧・張漢超・丁拱垣・范師孟^②・阮忠彥・黎伯适之諸賢，而時君或以見疎，宜其治之不古若也。他如陳克終之奸邪，陳慶餘之貪鄙，何足議哉。

【和訳6】

陳太宗は、天命が自らに帰するのに応えて、昭皇から禪譲を受けた。寛大で仁愛の徳をそなえ、威風堂々たる容貌であった。叛逆者を討伐し民衆を保護し、科挙を実施して志士を選抜した。宰相を置いて同族の有能な人物を選任し^①、朝廷の儀式制度を定めて礼法・刑法を作った。陳朝の制度は、こうして創始された。しかし後宮においては、行いに恥ずべき点があり^②、唐太祖の愚かな風習の轍を踏んでしまった。

聖宗は、寛容で仁愛にあふれた心を持ち、両親や年長者をよく敬う品性をそなえていた。父母を慈しみ一族は睦みあい、賢者を尊敬し道義を重んじた。賢良な人士を採用して進講させ、徳行にすぐれた人物を選抜して皇太子を補佐させた。陳朝の政権は、このおかげで磐石の基礎を築いた。しかし仏教に入れ込み、梁武帝と同じ弊習に染まった。

仁宗は、聖賢の精髓を体得し、仏相を有していた。健全な肉体を持ち、仁慈にあふれ温厚であった。詔を下して貧民に施し、民心は益々安定し、將軍を選出して異民族の侵入を防ぎ、元寇は平定された。数々の事業を実施し、その功績は燦々と永遠に輝き続ける。陳朝の賢君とみなすことができる。しかし仏典に熱心で、天健の庵を建立し、僧尼を養って、普明の鼎を鑄造したのは、帝王の執るべき政治のありかたではなかった。

英宗は、朝見の際に文武各官が居並ぶ順序を定め、志士を選抜する科挙の制度を作った。大旱魃があった時には罪人を再審し、大飢饉があった時には救済をおこなった。その政治は人民を食べさせることを重視し、風紀の取り締まりを優先した。こうして文化制度は、がらりと一新した。陳朝の立派な君主であった言えよう。しかし僧侶を安子山に引き連れ^③、人民を暎雲閣の建造にこき使ったのは、帝王たる者の度量ではない。

明宗は、天性の謙虚さを持ち、英宗の禪譲を受けた。筆墨のあそびに打ちこみ、水雲の宴集で文筆をはしらせた。賢者を励ます詩を作り、酒を飲んでも節度があった点は、賞賛すべきである。しかし官制はあまりに複雑で、刑罰は冤罪にあふれた。軽率にも奸臣の陳克終を信任し、陳国瑱を死へと追いやった。聡明であったが、これは玉に瑕であった。

憲宗は、天賦の英明さを持ち、太平の世を維持する運命を与えられた。自作をまとめて文集を作り、皇太子を教え導くため詩を作った。朝廷に居並ぶ学士たちは政令を定め、官僚たちは典雅な著作をものした。岩で堤防を建造して水害を防ぎ、水運倉庫を整備して流民を救済したのは^④、賛美すべきである。しかし、甘露寺の山峰を渡り歩き^⑤、瓊林寺の仏像に厚く帰依した^⑥。連日博打に興じて楽しむばかりで、連年災異が起こっても反省しなかった。

これはその仁愛と明察を損なう点である。

裕宗は、優れて明敏であり、学問に卓越していた。軍備はそろい文教は整備され、異民族は帰順した。紹豊・大治年間には、政務はみな成果を挙げており、評価できる。しかし晩年には鄒庚を信任し、淫らにも父子で一人の女を愛した⑦。賭博場を開設し、乱痴気騒ぎは限度を知らず、飢饉が頻発した。陳朝の功業は、これより衰微へ向かった。

芸宗は、内乱を平定して、旧来の制度を再興させた。天命と真摯に向き合い人民の愛護を実践し、国を守り統治するための展望があった。僊遊山で志士を選抜する試験をおこない⑧、葆和宮で余暇の文集を編纂した⑨。国家の礼儀に関する制度を作り、新たに堆積してできた砂州を王侯一族が占有する法令を廃止した⑩。その模範となる業績は⑪、天下にはっきりと示された。しかし謙虚さは十二分にあったが、決断力に欠けていた。外部からは占城の賊軍が国都を侵略し、内部では逆賊の胡季犛が帝位を窺っていた。陳朝による経国の大業は、ここに終わりを迎えた。

睿宗は、禅譲を受けたばかりの頃は、政治に真摯に取り組み、将軍を選抜して兵士を訓練し、科挙を実施して志士を採用し、詔書には皇帝の訓戒が述べられ、成し遂げるべき目標があるようだった⑫。しかし外戚を重用したことから、奸臣に篡奪の機会を与えてしまった。黎錫が忠心から上疏した諫言を斥け、杜子平のでたらめな奏上に耳を傾けた。占城に親征し、軽率にも倚忙洞に入り込み、些細な事に激怒して出兵したことが災いを招き、とうとう死んでしまった。

簡皇は、その幼稚さがますますひどくなる一方で、品格を保ち続けることもできなかった。財宝を天健山へ運び込んで隠し、剣と旗を胡季犛に下賜し厚く褒美をとらせた。賊軍を防ぐ策略もなく、命令を下し威厳を保つこともできなかった。とうとう蒲黄色の衣をまとった胡季犛が目的を遂げて、資福寺に拘禁された。

順宗は、権臣の命令に従って、名ばかりの帝位に就いた。金甌の事件もまだ終わらないうちに⑬、石造りの西都城で宴が手厚く挙^{うたげ}行された⑭。諸侯は胡季犛に天誅を下そうとしたが、陳元旦は至霊の山に隠居してしまった⑮。とうとう胡季犛のような輩を横行させ⑯、玉清観で脅迫されることとなった。

少帝は幼少であり、胡季犛が廢立の措置を立言し、こうして陳家の天下は滅んだ。

さてもう一度この事を論じよう。陳朝は歴代あわせて十二帝、その治世は百七十年あまりに及んだ。称賛すべき人物は、太宗には帝王の度量があり、聖宗は寛大で仁愛の徳をそなえ⑰、仁宗には数々の事業を実施した功績があり、英宗は誰もが認める孝行を実践し⑱、明宗は文教による統治を実現し、芸宗には政権を取り返した功績があった。しかし李恵宗は弑逆され、君臣の道は失われた。仁を知る人ならば行わないことである。靈慈国母陳氏は陳守度に娶られて、李恵宗との夫婦の恩に背いた。義を知る人ならば行わないことである。仁宗は

堂々たる天子でありながら、竹林大士として禅学にいそしんだ¹⁹。智慧ある者ならば行わないことである。やんごとなき王女である玄珍公主を占城へ嫁がせた。礼を知る者ならば行わないことである。父が息子の妻を娶るのは、倫理の乱れである。芸人の娘を寵愛したのは、災禍のきざしである。後宮の園池での遊びは²⁰、志を荒廃させた。外戚の権臣を重用して、政治を腐敗させた。帝王の修身・齐家・治国・平天下の道は、果たしてこのようなものだろうか。朝廷にひかえる臣下では、陳日燾が臧子関で功績を挙げ、陳国峻が白藤江で戦勝をおさめた。彼らの名誉は郭子儀・寇準と拮抗し、当然称賛すべきだ。陳光啓・馮佐周・陳元旦・范五老・段汝諧・張漢超・丁拱垣・范師孟²¹・阮忠彦・黎伯适らの諸賢については、当時の君主たちにとすると嫌われ遠ざけられたのだから、その政治が古風でなくなるのも当然であった。その他の陳克終の悪事・陳慶餘の貪欲などは、論じるにも及ばない。

【注6】

①宗室賢能 天応政平十五年〔1246〕に「宰相沢宗室賢能有道芸通詩書者為之（宰相は宗室の賢能の道芸有りて詩書に通ずる者を択びて之を為さしむ）」とある。

②慙徳 『尚書』仲虺之誥に「成湯放桀于南巢。惟有慙徳（成湯 桀を南巢に放つ。惟れ徳に慙ずる有り）」とある。

③然従沙門… 興隆二年〔1294〕の前にある英宗に対する評に「然聚沙門於安子之山」とあり、従を聚につくる。

④倉漕 開祐九年〔1337〕に「忠彦建議立漕倉（忠彦 漕倉を立てることを建議す）」とあり、漕倉とする。水運倉庫と訳出する。

⑤甘露之峰 越本1・越本2ともに甘露峰を地名として訳す。『越音詩集』（漢喃研究院A.1925）に陳明宗の「甘露寺」と題する詩を載せ、詩題の下に「在東潮（東潮に在り）」と注を附す。陳朝皇帝と東潮とのゆかりは深く、『大南一統志 嗣徳版』西南師範大学出版社/人民出版社・2015年の海陽省上・山川に「安子山，在東潮県東北三十五里。…按此山陳朝諸帝以為參禪住庵名地（安子山，東潮県の東北三十五里に在り。…按ずるに此の山は陳朝の諸帝以って參禪・住庵の名地と為す）」とある。甘露寺の鎮座する山峰と解釈する。

⑥瓊林之仏 越本1・越本2ともに瓊林仏を固有名詞として訳す。『大南一統志 嗣徳版』海陽省下・寺観に「瓊林寺，在東潮県河雷社瓊林山下平岡。李朝禪師阮明空所建。鑄銅像置寺中。陳太尊・仁尊常臨幸焉（瓊林寺は，東潮県の河雷社の瓊林山下の平岡に在り。李朝の禪師 阮明空の建てる所なり。銅像を鑄して寺中に置く。陳の太尊・仁尊 常に臨幸す）」とあり、陳の太宗・仁宗について言及するが、憲宗に対する言及はない。瓊林寺に安置された仏像と解釈する。

⑦聚麀 『礼記』曲礼上に、「夫唯禽獸無礼，故父子聚麀（夫れ唯だ禽獸は礼無し，故に父子 麀を聚にす）」とある。

- ⑧僊遊 昌符八年【1384】に「上皇於僊遊山萬福寺，試大学生段春雷・黄晦等三十名（上皇は僊遊山の萬福寺に於いて，大学生の段春雷・黄晦等三十名を試す）」とある。
- ⑨葆和 昌符七年【1383】に「上皇居葆和宮，命僉知内密院事阮茂先・礼部郎中潘義…輪直，賜食，詢以故事，逐日記録，編成八卷，目曰『葆和余筆』（上皇は葆和宮に居りて，僉知内密院事の阮茂先・礼部郎中の潘義…をして輪直せしめ，食を賜い，詢ねるに故事を以ってし，逐日記録し，編して八巻と成し，目して『葆和余筆』と曰う）」とある。
- ⑩沙州截脚 紹慶二年【1371】に「昭慈太后立截脚之法【注】謂截取新沙（昭慈太后 截脚の法を立つ【注】謂うところは新沙を截取するなり）」とある。
- ⑪規模功烈 紹慶元年【1370】の前にある芸宗に対する評では「規恢功烈」として，模を恢につくる。
- ⑫似 陳本・正和本は似につくる。孫本は自に誤る。
- ⑬金甌 紹成二年【1402】に「士人阮稟上書，以為前胡宜遜位，退去金甌（士人の阮稟は書を上りて，以って前胡は宜しく位を遜りて，金甌に退去すべしと為す）」とある。
- ⑭石城 越本1・越本2に，西都城を指すとある。紹成元年【1401】に「築西都城，多運石頭以就之（西都城を築き，多く石頭を運びて以って之に就く）」とある。
- ⑮至靈 越本1・越本2ともに，陳元旦が至靈山に帰隠したことを指すとする。昌符九年【1385】に「司徒・章肅国上侯元旦致仕，帰昆山（司徒・章肅国上侯の元旦 致仕して，昆山に帰る）」とある。越史の注に「昆山，在今海陽省至靈県支碛社（昆山は，今の海陽省至靈県支碛社に在り）」とある。
- ⑯赤髻 光泰七年【1397】に「赤髻季犛也（赤髻は季犛なり）」とある。『伝奇漫録』（『越南漢文小説叢刊』第一輯第一冊，学生書局・1987年）の「麗娘伝」注（439頁）に「赤髻猴，季犛也，蓋季犛丙申歲也（赤髻猴は，季犛なり，蓋し季犛は丙申の歳なり）」とある。丙は五行の火に属し，申は動物ではサルに当たる。
- ⑰仁厚之徳 前文では陳太宗を「有仁厚之徳（仁厚の徳有り）」と評していた。
- ⑱達孝 『礼記』中庸に「武王周公，其達孝矣乎（武王・周公，其れ達孝なるかな）」とある。
- ⑲竹林之禪 興隆十六年【1308】に「時上皇出家，居安子山之紫霄峰，自号竹林大士（時に上皇は出家して，安子山の紫霄峰に居り，自ら竹林大士と号す）」とある。
- ⑳後宮苑池 大治六年【1363】に「鑿池於後宮御苑（池を後宮の御苑に鑿つ）」とある。
- ㉑范師孟 陳本は苑師孟につくる。正和本・孫本は范師孟につくる。正和本にしたがう。

【原文7】

大抵李・陳之亡，雖由綱常之紊亂，亦由異端之蠱惑。發庫錢而造佛像，發庫銅而鑄洪鍾，發庫紙而寫佛經，李朝之事佛謹矣。然殺李氏之子孫者，纔出於陳守度之兇險，而佛不能救。

以天子而爲大士，以妃嬪而爲丘尼，以王主而爲僧衆，陳家之事佛篤矣。然弑陳氏之宗室者，皆出於胡季犛之姦欺，而佛不能度。則奉佛之事，果何補哉。

若夫胡季犛倚掖庭之親，稔姦臣之惡，肆虐以暴其民，欺君而篡其位，罪盈怨積，海內離心，明人入寇，身虜國亡，死作他鄉之鬼，卒爲天下所笑。胡漢蒼承篡國之後，行暴民之政。明人南侵而關河失守，社稷爲墟，天網恢恢，疎而不漏①。

嗚呼，禮莫大於分，分莫大於名②，名分者國之隄防，不可不謹，名分正則綱常立。彼龍鋌以弟弑兄而篡其國，是亂賊之尤也。而史臣乃以皇帝書之，則名不正矣。季犛以臣弑君，而奪其位，是姦臣之魁也。而史臣乃以先主書之，則分不明矣。若按『春秋』之法，定褒貶之公，固當削卧朝之僞稱，以誅逆賊，去季犛之僭號，以討姦臣，然後正名分於當時，扶綱常於萬世，而史臣之謬可盡洗矣。至若陳家忠義之臣，如周居敬・陳平仲・阮翰・陳錫・阮銳・陶堅・陳實・黎桶・陳紹・范玄齡・黎亞夫・阮決・阮雲霓・阮訶・黎勤・劉常・阮沆・何德隣・陳渴真・梁元彪之諸賢，正氣猶存，芳名不朽，其節義之稱，不可枚舉。爲陳家而思報仇，裴伯耆之心，卽包胥・豫讓之心也。爲陳家而請立後，黎景詢之心，卽舅犯・仁傑之心也。「萬言之書」③，忠貫日月，非斯文之力乎。「七斬之疏」④，義感鬼神，非吾儒之功乎。惜其時君昏暗，不能信聽，以致淪亡，無足怪矣。

迨夫後陳簡定帝卽位於播遷之餘，有鄧悉・景眞之徒，與之協謀，奮興義旅，致討明賊。逋姑之戰，幾復陳祚，所謂仁義之師也。夫何輕信讒言，遽殺良將，速取於敗。陳重光帝卽位於離亂之際，有鄧容・阮帥之儔，與之戮力⑤，共圖帝業。蔡茄之捷，軍聲大振，所謂復讎之舉也。夫何將帥不和，失其機會，遂至於亡。嗟夫，鄧悉・景眞以讒見殺，而明人入寇，視夫檀道濟見殺，而魏人來侵，岳武穆見殺，而金人入寇。讒佞覆人國家，前後一轍，人君用舍之際，不可不謹。閩胡旣虜，後陳亦亡，境內瓜分幅裂⑥，甚於周季之時，官吏法峻刑苛，慘於秦亡之日。由是明人肆虐，生民塗炭，未有甚於此時也。

【和訳7】

李朝・陳朝の滅亡について総括すると、それは三綱五常の破綻によるとは言え、また一面では異端の蠱惑によるものとも言える。国庫から錢を出して仏像を造立し、国庫から銅を出して梵鐘を铸造し、国庫から紙を出して仏典を書き写したように、李朝は敬虔に仏教を信仰した。しかし李氏の子孫が殺害されたのは、たかが陳守度ひとりの凶行による。そして仏はこれを救済することができなかつた。天子を大士とみなし、天子の側室を比丘尼とみなし、大王・公主を僧徒とみなしたように、陳家は篤実に仏を信仰した。しかし陳氏の一族が弑逆されたのは、すべて胡季犛の欺瞞による。そして仏はこれを済度できなかつた。つまり仏に仕えることは、結局なんの足しにもならない。

さて胡季犛は皇妃の親類であることを笠に着て、奸臣として悪事を積み重ねた。残虐の限

りを尽くして人民を痛めつけ、主君を欺いて帝位を篡奪し、罪は充満し怨みは積もった。国内は団結せず、明朝の軍隊が侵入して、捕虜となり国は滅びた。見知らぬよその土地で死に、とうとう天下の笑いものとなった。胡漢蒼は、胡季犛による篡奪の後を継ぎ、人民を虐げる政治をおこなった。明朝の軍隊は南進して侵略をおこない、山川要害の地も守備を突破され、国は廢墟と化した。天が悪人を捕えるために張り巡らした網は広大で、目は粗いが悪事を取り逃がすことはない①。

ああ、礼儀において身のほどよりも大切なものはない、身のほどにおいて称号より大切なものはない②。称号・身のほどは、国家の堤防であり、慎重に扱わなくてはならない。称号・身のほどが正しく対応していれば、三綱五常も成立する。あの黎龍鋌は、弟の身のほどで兄を殺害し、その国を篡奪した。これは乱賊の最たるものである。しかし史臣はあろうことか皇帝の称号によって彼を記録し、称号が正しくないのである。胡季犛は、臣下の身のほどで君主を殺害し、その帝位を奪った。これはこの上ない奸臣である。しかし史臣はあろうことか先主の称号によって彼を記録し、身のほどを明確にしていないのである。もしも『春秋』の筆法に照らして、賞賛と批判とを公平に示すとすれば、当然ながら臥朝が皇帝を偽称したことを削除して、この逆賊に天誅を下し、胡季犛が帝位を僭称したことを除去して、この奸臣を成敗すべきである。当時の称号と身のほどを合致させることで、未来永劫にわたって三綱五常を支持することになる。このように史臣の誤謬はすべて修正されるべきだ。

陳朝の忠臣については、例えば周居敬・陳平仲・阮翰・陳錫・阮銳・陶堅・陳実・黎桶・陳紹・范玄齡・黎亜夫・阮決・阮雲霓・阮訶・黎勤・劉常・阮沆・何徳隣・陳渴真・梁元彪らの諸賢は、公正な心意気をまだなお残しており、その芳名が朽ちることはない。彼らの称賛されるべき節義は、枚挙に暇がない。陳家のために仇を討とうと思った裴伯耆の気持ちは、すなわち包胥・豫讓の気持ちと同じである。陳家のために後継を立てることを求めた黎景詢の心は、すなわち狐偃・狄仁傑の心と同じである。黎景詢が「万言の書」を奉った③、その日月をも貫く忠誠、これこそ斯文の力である。朱安が「七斬の疏」を奏上した④、その神霊をも感動させる忠義、これこそ我らが儒教の功績である。残念ながら当時の君主は暗愚で、聴く耳を持たず、結果として滅亡したのは、なにも怪しむに足らない。

それから後陳の簡定帝は、流浪の末に即位して、鄧悉・阮景真らの仲間と知恵を出し合い、義兵を挙げ、明朝の賊軍を討伐した。逋姑の戦いでは、陳朝の復興はもはや間近であり、それこそ仁義の軍であった。それがあろうことか軽率にも讒言を信じて、躁急に優秀な将軍を殺してしまい、あつという間に敗戦してしまった。

後陳の重光帝は、戦乱の間に即位し、鄧容・阮帥らの仲間と力を合わせて⑤、共に帝業を興そうとした。蔡茄の戦勝では、勝鬨かちどきを大いに挙げ、これこそ復讐の大挙であった。それがあろうことか将軍同士がいがみ合い、機会を逸して、ついに滅亡してしまった。ああ、鄧悉・

阮景真是讒言によって殺され、明朝の軍隊が侵入した。これと同類の出来事は、檀道濟が殺されて、北魏の軍隊が来襲し、岳飛が殺されて、金の軍隊が侵略にきたことだ。讒佞の徒が国家を転覆させることは、過去も現在も同様であり、君主は人材を用いる際、慎重にすべきだ。偽胡朝は捕虜となり、後陳朝もまた滅んだ。国土の分裂は⑥、春秋・戦国時代よりもひどかった。官吏の下す法令が厳しく刑罰が苛酷なことは、秦末よりも悲惨だった。これ以降、明朝の人々が残虐の限りを尽くし、人民が塗炭の苦しみをなめたことは、前例のないひどさであった。

【注7】

- ①天網恢恢… 陳本は天網恢恢につくる。孫本は天網恢恢に誤る。『老子』に「天網恢恢，疏而不失（天網恢恢，疏にして失わず）」とある。
- ②礼莫大於… 『資治通鑑』威烈王二十三年に「臣聞天子之職莫大於礼，礼莫大於分，分莫大於名（臣聞くならく天子の職は礼より大いなるは莫く，礼は分より大いなるは莫く，分は名より大いなるは莫し）」とある。
- ③万言之書 重光三年【1411】に「景恂為胡氏下齋学生，興慶元年，作「万言書」（景恂は胡氏の下齋の学生たり，興慶元年【1407】，「万言の書」を作る）」とある。
- ④七斬之疏 紹慶元年【1370】に「乃上疏乞斬佞臣七人。皆權幸者。時人号「七斬疏」（乃ち上疏して佞臣七人を斬ることを乞う。皆 權幸なる者なり。時人は「七斬の疏」と号す）」とある。
- ⑤与之戮力 『尚書』湯誥に「聿求元聖，与之戮力，以与爾有衆請命（ついでに元聖を求め，之と力を戮せ，以って爾有衆の与に命を請う）」とある。
- ⑥瓜分蝠裂 陳本は瓜分蝠裂につくる。孫本は瓜分蝠裂に誤る。

【原文8】

幸賴天道好還①，人心協順②。洪惟國朝太祖高皇帝以殷湯智勇之資，奮周武仁義之旅，收用豪傑，掃蕩妖氛。雖以明將梟雄如柳昇・梁銘之輩，皆陣陷而屍輿。狡譎如崔聚・黃福之徒，亦計窮而面縛。二十餘年之亂，一旦削平，山河以之改觀，海宇以之寧謐。由太祖高皇帝勇智寬仁，君臣協心同德之所致也③。觀其帝之神武不殺④，即天地之心也。秋毫無犯⑤，即天地之量也。收養諸路流民⑥，即天地之仁也。放歸十萬降卒，即天地之德也。舉賢有令⑦，即成湯之立賢無方也⑧。論降有書，即成湯之代虐以寬也⑨。兵農有法，即武王之農用八政也⑩。牧民有條，即武王之寵綏四方也⑪。諭以十條軍政，講君臣之義也。布以六條教化，明父子之倫也。慎重刑罰，謹號令之信也。結好明國，存交隣之禮也。若夫建太廟以奉祖考，設學校以明人倫。「平吳大誥」，無非仁義忠信之言。「藍山實錄」，無非修齊治平之道。宜乎定大越之乾坤，奠皇圖之社稷，豈趙・丁・李・陳所能及哉。然後知帝王大業也，綱常正道也。綱常立而帝王之大

業以成，仁義明而天下之大器以定^⑫。湯武推仁義之心，爽仁義之師^⑬。其得天下以正，守天下以仁，故能臻有道之長。欽惟太祖高皇帝取天下於狂明寇亂之餘，其得天下也甚正，其守天下也以仁，尤必維持之以義，固結之以仁，照臨之以智，範圍之以信，其修齊治平之道，則與唐虞三代而比隆，于以衍億載綿洪之業，其積累固非一日矣。

方今皇上陛下，恢太祖高皇帝之洪圖，續太祖高皇帝之良法，特命臣撰「越鑑通考總論」，蓋以扶天地綱常之道，明帝王治亂之原，與夫述太祖高皇帝創業之艱難，使天下後世誦念而不忘焉。伏願皇帝陛下於萬幾之暇，講明治道，讀趙・丁・李・陳之事，則知天命人心之去留，識國統邦圖之隆替，辨君子小人之消長，察氣數風俗之盛衰，而歷代政事之得失可得而明矣。讀本朝太祖高皇帝創業之事，則想卧薪嘗膽之焦勞，念沐雨櫛風之艱苦，審制治保邦之至計，恢子民經國之遠圖，而聖朝宏遠規模可得而見矣。於是聖學益以高明^⑭，聖域益以深造，治道益以尊隆，所以爲天地而立心，所以爲綱常而立極，爲生民而立命，爲億萬世而開太平，于以奠國勢於泰磐^⑮，于以措生民於衽席^⑯，而帝王大業洪圖與天地同悠久矣。

洪順六年甲戌仲秋，賜甲辰科進士，特進金紫榮祿大夫・少保・禮部尚書・東閣大學士，兼國子監祭酒・知經筵事，敦書伯，柱國臣黎嵩謹奉勅撰^⑰

【和訳 8】

幸いにも因果は巡るのが天意というもの^①，民心は調和し^②，偉大なる本朝の太祖高皇帝は，殷の湯王とおなじ智勇を具え，周の武王のように仁義の軍を起し，豪傑を仲間に入れ，厄災を掃蕩した。明朝の將軍で勇猛な豪傑といえば，柳昇・梁銘といった連中がいたが，みな陣営が陥落し死屍累々たる有様となった。ずる賢さでは，崔聚・黃福などの面々がいたが，これもまた万策尽きて投降した。二十数年の戦乱が一度平定されると，山河は面目を一新し，国内は平靜を取り戻した。太祖高皇帝の知勇と寛仁のもと，臣下たちがひとつの理想を掲げ共に邁進した結果，実現したのである^③。

皇帝は神のような武勇を具えてしかも人を殺さず^④，天地のように大きな心を持つ。軍紀は厳正で民間の財産を少しも収奪せず^⑤，天地のように広い度量を持つ。各地の流民を保護したのは^⑥，天地のように深い仁愛を持つからである。十万の降伏した兵士を釈放して国へ帰させたのは，天地のように高い徳性を持つからである。賢者を挙用する法令を出したのは^⑦，これこそ殷の湯王が賢者でさえあれば取り立て，こだわりがなかったのと同じである^⑧。降服者について論じた詔書を下したのは，これこそ殷の湯王が桀王の虐政を寛大な政治に代えたのと同じである^⑨。兵役と農作に関して法令を出したのは，これこそ周の武王が八つの方面で心をこめて政治を執ったのと同様である^⑩。人民を統治し秩序を保ったのは，これこそ周の武王が天下四方の民を愛護し安心させたのと同様である^⑪。十条の軍政に関する聖諭を下したのは，臣下たるものの道義を解説したのである。六条の教化に関する布令を出した

のは、父子の倫理を明確にしたのである。刑罰を下すのに慎重であったのは、号令が的確であるよう気を付けたためである。明朝と友好関係を結んだのは、外交上の礼儀を維持したのである。また宗廟を建てて祖先を祭り、学校を設置して人倫を説き明かした。「平呉大誥」は、仁義忠信の言葉で満たされており、「藍山実録」は、修身・齐家・治国・平天下の道を説き尽くしている。当たり前のように、大越の天下は安定し、本朝の守り神は祭祀をうけ、先の趙・丁・李・陳の四朝が到底及ばない高みへと達した。こうしてこれが帝王の大業であり、三綱五常の正道であったことが追認された。三綱五常を実践したことで、帝王の大業は成就し、仁義を明確にしたことで、天下の大器ともいべき国家は安定した^②。殷の湯王・周の武王は仁義の心を普及させ、仁義によって民衆を啓蒙した^③。彼らは正義によって天下を手に入れ、仁慈によって天下を治めた。だから末永く公明正大でいることができた。謹んで申し上げるに、太祖高皇帝は、狂った明朝の侵略の末に天下を取り戻した。徹底した正義によって天下を手に入れ、仁慈によって天下を治めた。特筆すべきは、必ず道義によって天下を維持し、仁慈によって天下を團結させ、智慧によって天下を観察し、信頼によって天下を秩序づけたことだ。その修身・齐家・治国・平天下の道は、堯・舜・夏・殷・周の治世に比肩する。こうして一億年の先まで脈々と続くであろう大業は広がり続ける、その積み重ねはもちろん一日にして成るものではない。

今上皇帝は、太祖高皇帝の偉大な計画を発展させ、太祖高皇帝の素晴らしい法令を継承した。わたくしに特命を与え「越鑑通考総論」を執筆させたのは、これによって天下でおこなわれる三綱五常の道を支持し、歴代帝王のもたらした太平と混乱の原因を究明しようとしたのだ。合わせて太祖高皇帝が創業に当たって直面した苦難を記述し、この天下を生きる後世の人々がこれを朗誦して忘れないようにしたのである。どうか煩雑な政務の暇をみて、政治のありかたを究明してくださいますよう、ひれ伏し皇帝陛下にお願い申し上げます。趙・丁・李・陳四朝の記録を読むことで、天命がいかにかに下され移ろい、民心がいかにかに集まり離れるかを知り、王権がいかにかに勃興し没落し、版図がいかにかに拡大し縮小するかを理解し、立派な人物とつまらない人物がいかにかに勢いを振るい落ちぶれるかを見分け、気候と風俗がいかにかに盛衰するかに通暁することができる。こうして歴代の政務がどう成功しどう失敗したのかを理解できる。また本朝の太祖高皇帝の創業にまつわる事績を読めば、復讐のため耐え忍んだ焦燥と苦労の日々に思いを馳せ、雨風に我慢を重ねた艱難に考えをめぐらし、国防と統治について最良の方法を知り尽くし、人民を愛護し国家を経営するための遠大な計画をさらに発展させることができる。そうすれば我が神聖王朝の大規模な展望は、もう目の前である。このようにして儒学はますます崇高になり^④、聖人の境地はますます精緻を究め、国家の行政はますます尊く立派になる。天下のために決意を下し、三綱五常のために原則を立て、人民のために天命を全うし、このさき億万年のために太平の世を実現することにより、国権を安泰磐石

な基礎の上に築き^⑮、人民を太平安心な生活の中に置くのだ^⑯。こうして帝王の大いなる事業・壮大な計画は、天地と同じく悠久なものとなる。

洪順六年甲戌【1514】の仲秋、甲辰【1484】の科挙で進士となり、特進金紫榮禄大夫・少保・礼部尚書・東閣大学士を務め、国子監祭酒・知経筵事を兼任する、敦書伯爵で柱国臣の黎嵩が、謹んで勅命を授かりしたためた^⑰。

【注 8】

- ①好還 『老子』に「以道佐人主者，不以兵強天下，其事好還（道を以って人主を佐ける者は、兵を以って天下に強からず、其の事 還るを好む）」とある。
- ②協 陳本は協につくる。正和本・孫本は協につくる。正和本にしたがう。
- ③協 陳本は協につくる。正和本は偏を判別できず、旁を苜につくる。孫本は協につくる。
- (3) 【8】 ②で、正和本は協につくることから、ここも協とする。
- ④神武不殺 『易』繫辭上に「古之聰明叡知，神武而不殺者夫（古えの聰明叡知，神武にして殺さざる者か）」とある。
- ⑤秋毫 陳本・正和本は秋毫につくる。孫本は秋豪につくる。
- ⑥收養 陳本・正和本は收養につくる。孫本は秋養に誤る。
- ⑦舉賢 陳本は賢舉に誤る。正和本・孫本は舉賢につくる。正和本にしたがう。
- ⑧即成湯… 即字について、陳本は則に誤る。正和本・孫本は即につくる。正和本にしたがう。また『孟子』離婁下に「湯執中，立賢無方（湯は中を執り，賢を立てるに方無し）」とある。
- ⑨代虐以寛 『尚書』伊訓に「代虐以寛，兆民允懐（虐に代えるに寛を以ってし，兆民允に懐く）」とある。
- ⑩農用八政 『尚書』洪範に「次三曰農用八政（次の三に曰わく農く八政を用う）」とある。
- ⑪寵綏四方 『尚書』泰誓上に「天佑下民，作之君，作之師。惟其克相上帝，寵綏四方（天下民を佑け，之が君を作り，之が師を作る。惟れ其れ克く上帝を相けて，四方を寵綏す）」とある。
- ⑫天下之… 『荀子』王霸に「国者，天下之大器也，重任也（国は，天下の大器なり，重任なり）」とある。
- ⑬爽仁義之… 『尚書』仲虺之誥に「帝用不臧，式商受命，用爽厥師【孔伝】爽明也。用商受王命，用明其衆。言為主也（帝はもって臧みせず，商を式いて命を受けしめ，もって其の師を爽らかならしむ【孔伝】爽は明なり。商を用いて王命を受けしめ，用って其の衆を明らかならしむ。主と為るを言うなり）」とある。
- ⑭聖學 陳本・正和本は聖學につくる。孫本は聖邦に誤る。
- ⑮泰磐 威穆帝「正統十二年九月二十日上皇太后進貢方物表」（明・李文鳳『越嶠書』卷十五）に「措生民於衽席，翊扶宝社。奠宗社於泰磐，凡囿生成（生民を衽席に措き，宝社を翊扶す。宗

社を泰磐きたに奠め、生成を凡固す)」とある。

⑩枉席 ふとん、延いては太平安心な生活を指す。『大戴礼記』主言に「是故明主之守也，必折衝乎千里之外。其征也，枉席之上還師（是の故に明主の守るや，必ず千里の外に折衝す。其の征するや，枉席の上に師を還らす）」とある。

⑪謹奉勅撰 正和本は勅撰の二字を欠く。陳本は他本から勅撰の二字を補う。孫本は何ら注を附すことなく、勅撰の二字を加える。また陳本は「謹奉勅撰」の後、さらに『大越史記全書』引田利章・1885年のみに基づいて「越鑑通考總論終」を加えるが、この七字は削除する。

※これはJSPS 科研費・基盤研究(C)「ベトナム漢文学の研究」課題番号：JP21K00468
の助成をうけたものである。